

書評

『木星・土星ガイドブック』

鷹 宏道 著

飯塚礼子（明星大学、千葉市科学館プラネタリウム）



鷹 宏道 著

恒星社厚生閣／206 ページ

本体 3,000+税／2020 年 2 月発行

2020 年 7 月に「衝」を迎え、夏から秋にかけて木星・土星が見頃を迎えている。秋には火星の大接近があるが、火星については前月号の書評でご紹介したので、今回は『木星・土星ガイドブック』を紹介する。著者は元 平塚市博物館館長の鷹宏道で、日本プラネタリウム協議会理事長、国際科学映像祭実行委員長を歴任。また、JAXA 宇宙科学研究所広報委員、国際科学映像祭実行委員など幅広く活躍している。

惑星について調べようとすれば、過去においての情報はネットでも検索できる。惑星の写真も出てくる。だが紹介する『木星・土星ガイドブック』の内容はそれとは一味違う。今後 50 年にわたって期待できる観測日も載っているのだ。

第二章では「木星・土星の見方、楽しみ方」についてである。木星・土星は非常に明るく特に木星は目立つ。惑星の星空の動きを説明

するためには、ケプラーの法則や惑星と地球との宇宙空間での位置関係によって「衝」だけの「合」だの言い方がある。地球上から見る惑星の動きを「順行」、「留」、「逆行」の言葉で表現される。一見すると迷ってしまうが、本内では丁寧に説明しているので解りやすい。ぜひ会合周期についても理解を深めてほしい。そうすれば観測好機が判るのである。また、地球から見て惑星同士が寄り添って見えることを惑星会合という。複数の惑星が接近して観測できる日が掲載されており、その日が待ち遠しく感じられる。

地球から木星・土星を観測するだけではその詳細はわからない。そこで探査機による探査が行われている。探査機から画像が送られ、惑星の真の姿を垣間見ることができる。本書では多くの画像が掲載されており、画像のとりえ方の紹介があり、科学的解明にどのように役立っているのかわかる。最新の木星・土星についての見地を新たにできるだろう。また、様々な機関から集められた画像を一気に拝見できるのもとても楽しいことである。

惑星・衛星の解明には探査機による成果が大きく、時代とともに探査機も変化している。探査機がどのような装置でこれらの素顔に迫っているのか、個々の打上げから探査機の紹介も面白い。木星・土星の衛星の数は 80 個を超えている。個性豊かな衛星についての丁寧な解説で楽しめる。著書も述べているが、ぜひ皆様に知の大海を深めていただきたい。

飯塚 礼子

yf9r-iizk@asahi-net.or.jp